

小学校における国際理解教育と留学生交流

花見 槇子・橋本 顕彦

International Education and Exchange at Elementary School

HANAMI Makiko and HASHIMOTO Akihiko

〈Abstract〉

This is a report of an experimental program for international education and exchange at the Elementary School of the Faculty of Education and the Center for International Students. The two educational institutions at Mie University attempt to develop in cooperation a sustainable program which suits the needs of elementary school children and also benefits the international students of the university who are learning the language and culture of Japan.

The program is developed under the following conditions: 1) a group of international students visit the Elementary School three times per semester and share activities during lunch, free time, cleaning and one afternoon class with the same group of children, 2) program coordinators of the two institutions plan three steps of class activities in close communication and involve children and students in the processes of planning and evaluation as much as possible, and 3) the program is part of the course (Cross-cultural Understanding and Adaptation) offered at the Center for International Students and is incorporated into the regular curriculum at the Elementary School.

The report describes one of the programs for a social studies class of sixth graders who had stimulating discussions with the international students on the topics that involve differential values and perspectives, and examines the successful aspects of the program as well as the problems. Further, it evaluates the merits and limits of the program as opportunities for the international students to develop their language and self-management skills in cross-cultural situations.

キーワード：国際理解教育、留学生交流、異文化接触、討論、価値観の相違

はじめに

これは、三重大大学の留学生センターと教育学部附属小学校の協力により行われている国際交流活動に関する報告である。

近年、小学校段階における国際理解教育の開発がさかんに試みられるようになっており、

三重大学にも、近隣の小学校より、留学生の派遣要請が相次いでいる。その場合、センターでは留学生個人に連絡を取り、授業や研究に支障のない限り地域社会の要望に応じて参加してもらうよう配慮しているが、そうしたプログラムの多くは、一回限りのイベント的色彩の強い企画で、留学生の出身国の衣食、音楽、踊り、子どもの遊び等の紹介が主な内容になっている。すなわち、まず外国人や異なった文化に親しむ、ということが現状では国際理解教育の出発点となっており、そこからいかに継続性と発展性のあるプログラムに育て、小学校教育のなかに統合し定着させるかがこれからの課題であると考えられる。

このプログラムは、そうした原初的な交流から始まって、プログラムの継続的發展を進めるために、留学生センターと附属小が協力し合うことが前提となっている。双方の協力関係の概要は以下のようなものである。

- 1) 大学の前期及び後期をそれぞれ1期として、期間内に3回（1ヶ月に1回平均）、留学生センターの担当者が留学生グループを引率して附属小を訪問する。
- 2) 附属小は、各期毎に、このプログラムに参加する学年またはクラスを選び、その学期の授業と関連したプログラム案を提起し、センターの担当者とはあらかじめ協議する。
- 3) センターの担当者は、自身の担当する留学生のための日本文化理解コースの一貫として附属小との交流プログラムを位置づけ、授業の中でプログラムの説明を行い準備をする。
- 4) 留学生たちは、3回の交流すべてに参加し、しかも、同じクラスの同じグループと活動を共にする。
- 5) 毎回のプログラムは、給食に始まって、自由時間、掃除を経て午後の1時限で、授業としての国際理解教育を行う。
- 6) 留学生とセンターの担当者は、センターでの授業の中で交流の結果やそのインパクト、問題点等を討論し、次回の交流に反映させる。この討論に附属小の指導者が参加することもある。
- 7) このプログラムが附属小の国際理解教育に資するだけでなく、広く日本人の各層と交流し、日本の社会や文化に関する留学生の理解を深める教育的機会のひとつとして、互恵的に発展することを目指す。

このプログラムは1998年後期開始以来現在も継続中であり、各期毎に異なる留学生グループが訪れるものの、学年移動とともに2回、3回とこのプログラムを経験する子どもたちも出てきており、順調に定着しつつある。それとともに、附属小の各指導者たちも創意工夫を重ね、カリキュラム開発を進めている。本論は、平成12年4月からの1期間、

6年生の1クラスで行った活動の報告と考察である。

1. 国際理解学習「留学生といっしょに日本について考えよう」の企画と実践

附属小6年C組の子どもたちは、1学期、総合的な学習として、「留学生といっしょに日本について考えよう」という単元の学習に取り組んだ。学習を始める前に、総合的な学習として指導者が大切にしたいと考えたことは、できる限り子どもたちの問題意識や願いを中心に単元を組むということであった。また、子どもたちの問題意識を中心に単元を進めるにあたって、子どもたちの現在の問題意識や今行っている学習がこれから先、どのような学習につながっていくのかという可能性を探ろうとも考えた。

国際理解学習においては、外国人との交流の機会を持ち、ただ遊んだり、何かの活動をいっしょにしたりするというだけではなく、その交流によって、子どもたちが問題意識を持ったり、次の交流にむけて調べをしたり考えてみたりすることにつながるような活動が望ましい。そのためには、外国人にもその考えを聞かせてもらうことができるような場を持ちたい。そして、子どもたちと外国人が本気でお互いの価値観をぶつけ合うような学習ができないかと考えた。

1. 単元の企画

子どもたちが、外国人といえば浮かんでくるイメージを出し合ったとき、多く出てきたものは「白人」「金髪」「アメリカ人」「かっこいい」「背が高い」「足が長い」というものであった。外国人という和白人を考える子どもが多く、自分たちの身近なアジアの地域に目を向けている子どもは少なかった。アジアの人に目を向けたり、子どもたちの外国人に対する一面的な見方をふりかえらせたりする機会を与えることの必要性を感じた。そこで、中国・ミャンマー・ドイツの3カ国の留学生との交流計画を進めることにした。

子どもたちからは、「日本の歌や遊びを紹介したい」「日本の国自慢をしたい」「日本と外国の関わりを考えたい」「歴史を学習しているので、日本の歴史を紹介したい」「外国の人からも意見を聞いたり、教えてもらったりしたい」といった意見が出てきた。

指導者は、子どもたちの意見を聞いて、先の「白人」「金髪」「背が高い」というような外国人のイメージを再考させたり、自分たちが日本の国自慢をしたり、自分たちの考える日本、日本史観というようなものを外国人にぶつけたりすることで、価値観の対立が現れ、自分たちの考えを見直す可能性があるのではないかと考えた。また、中国・ミャンマー・ドイツは日本と過去の戦争の時に関わりの深かった国々であるので、社会科の戦争の学習と密接に関連してくると考えた。

そこで、1回目の交流を「子どもたちの考える日本や日本文化の紹介」とし、2回目の交流を「留学生の考える日本」とすることにした。そして、交流の最終である3回目は、1回目と2回目に出てきたことをもとに、話し合うこととした。

以下の3つを単元の目標としてたてた。

- 留学生に日本を紹介したり、留学生から日本や日本人について抱いている考えや思いを聞いたり、それをもとに話し合ったりすることで、日本や日本の文化を再認識したり、考えの多様性に気づいたりすることができる。
- 過去の戦時中に、日本が中国やミャンマーと戦争をしたことやドイツと同盟国であったこと、戦争中に日本がしたことが、今も国際社会における日本に対する見方につながっていることに気づき、そのことについてこれから学習をしていこうと考えるようになる。
- 留学生に対して、積極的に自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりして、親しむことができる。

日本を共通のテーマに、日本人である子どもたちと留学生たちがお互いの考えや意見を交換することによって、子どもたちは、今まで知っていると思っていた日本について、改めて表現しようとするのが難しいと感じたり、自分たちが意外に日本のことについて知らないと感じたりもするようになった。また、そのことで自分たちなりに調べてみて、日本とはいったいどういう国なのか、日本の文化とはどういうものなのかと考え、日本や日本の文化を再認識することができることも考えた。

また、留学生から、日本について考えていることを聞いたり、自分たちの日本紹介について思ったことを聞くことで、日本に対する考え方に共通点や相違点があることや、国や人による考え方の多様性にも気づくこともできると考えた。そして、自分たちの考えている日本というものを改めて見直すことにもつながると考えた。

来ていただいた留学生のうち、ドイツ人のSさん以外の、ミャンマー人のWさん、中国人のCさんは、まだ日本語での日常会話が十分にできないので、意志を通じ合うことの難しさも子どもたちは感じるのではないかと考えた。日本語が通じにくい相手とどのようにコミュニケーションをとるかということも、今回学ぶことができると考えた点であった。

3回の交流は、給食の時間に留学生に来てもらい、いっしょに食事をとってもらい、いっしょに昼休みを過ごし、掃除をしてから、5限目の交流の時間を迎えるという設定で行うこととした。いきなり交流の時間に入るのではなく、そうすることで、5限目の交流をス

ムーズに行うことができると考えたからである。

2. 第1回目の交流：留学生に日本や日本文化を紹介しよう

1回目の交流については、子どもたちは日本をどのように紹介できるだろうかと考え、その方法を話し合った。そして、「6Cの考える日本の紹介」「日本の自慢」「日本の歌」「日本の遊び」「日本の昔話」という項目に分け、班で調べや発表の準備を進めていくこととした。

日本の自慢班は、伝統工芸品の紹介と浴衣の着付けの紹介をし、日本の遊び班は、カルタの紹介とカルタに使われていることわざの説明をし、日本の歌班は、校歌と君が代の説明と歌唱をしたあと、盆踊りをいっしょに踊った。日本の昔話班は、「桃太郎」と「浦島太郎」の概略説明と「竜宮のお嫁さん」の紙芝居をした。日本の紹介班の子どもたちは、日本は伝統文化を大切にしている国であること、日本人（6Cの多くの子どもたち）は、自分たちを、背が高く鼻が高い外国人に比べて容姿が劣ると考えていること、性格が暗いイメージがあること、日本は神の国という考えをもった政治家がいること、日本のよい点は、みんなで協力する体制ができていること等を紹介した。

留学生は、時折発表に対して質問をしながら興味深げに見入っていた。終了後、控え室で、Wさんは「今日の発表は大変よかった。興味深い内容だった」と語ってくれた。ドイツ人のSさんからは、「何でもいいので、子どもたちと自分の今思っていることについて討論をしてみたい」という申し出があった。Sさんは日本人が議論をしたがらず、三重大の学生と議論ができないことを不満に思っているとのことであった。

授業を終えての子どもたちの感想は、「お正月にするカルタをいつも当たり前のようにやっていたけど、日本の遊びを改めて調べてみると、ルールの説明をする難しさやことわざの意味などが分かってよかったと思った。」「今度の、外国人は日本をどんな国だと思っているかということが楽しみだ。」「2時間ほどあったのに短い時間だと感じられたので熱中できていたのかなと思った。」「こういうことで外国人とふれあえたのがすばらしいと思った。いつもは日本のことなんて考えたこともなかったので、この交流で私もみんなも、そしてSさんWさんも色々日本のことが少しでも分かったと思う。」といったものであった。

日本の遊び班は、カルタとりを紹介したが、紹介するにあたって、他の子どもたちから「どうしてカルタとりを紹介するのが分かりにくい。カルタとりの紹介をすることがどうして日本や日本文化の紹介になるのか」といったことを指摘され悩んだ末、「カルタとりは正月という節目にするゲームで、日本の昔からの教え（ことわざ）をつかっているから、そのことも日本人の考え方につながるから」という説明をしていた。感想からも苦勞

した様子や改めて日本の文化について考えた様子が分かる。子どもたちは、留学生に日本を紹介することで、自分たちが身近すぎて普段考えもしなかった日本について考える機会を持ったのである。

3. 第2回目の交流：留学生の日本や日本人に対する考えを聞こう

第2回は、3人の留学生から、日本についてのイメージや日本のことで不思議に思うこと、日本での自分たちの生活等について話してもらった。

Sさんからは、ドイツでは、日本は、将軍・切腹・寿司・芸者・神社・茶道といった「伝統的なイメージ」と戦争・神風・ハイテク・交通渋滞・ゲーム・新幹線といった「現代的なイメージ」があること、ドイツに来る日本人観光客には、スーツにスポーツシューズ、帽子、カメラといったイメージが定着していることが話された。気になったこととして、ゴミを自分の庭で燃やすことや暴走族がいることが出された。また、不思議に思うこととして、6Cの子どもたちが、「背が高い・鼻が高い・足が長い」といったことを長所ととらえていることが分からないとの指摘がされた。

Wさんからは、日本文化は自分にとって面白く、貴重であること、ミャンマーは第2次世界大戦でつらい思いをしたから、もうそんなことは繰り返したくないこと、日本がこのまま平和な国でいてほしいということが話された。子どもたちは、「日本文化がどうして面白いのか」「ミャンマーの人は日本のことをどう思っているのか」といった質問をしたが、日本語の壁もあり、答えてもらえなかった。

Cさんからは、日本はきれいで動物の多い国であること、自分は日本の歴史に興味があること、自分は日本人の考え方や話し方がよく分からないので、自分の先生に「ご苦労様」といってしまったり、年上の人に「君」といってしまったりして、失敗したというようなことが話された。

子どもたちは時折質問もしながら熱心に聞いていた。自分たちの国や自分たちが留学生の目にどのように映っているのかということを心配しているようだった。前にも子どもたちは日本人を「暗い」「地味」「容姿に劣る」「自分の意見を言えない」と発表しており、自分たちが日本をマイナスイメージでとらえているので外国人も悪いイメージを持っていないかと心配していたようであった。3人の方話を聞いて、悪いイメージを持っていなかったのではとしたというような感想が話された。

第2回を終えて、子どもたちと第3回に向け、どんなことをしたいか話し合ったところ、以下のようなことが出てきた。

- 日本人（自分たち）が、鼻や背が高いことや、足が長いことを長所だと考えるのは不思議だとSさんが言ったことについて話し合いたい。
- Wさんの言っていた日本の文化は面白く貴重であるということがよく分からないので話し合いたい。
- Wさんに、ミャンマーの人やWさんが日本や日本人をどう思っているのか教えてほしい。
- Cさんの言っていた「日本人の考え方が理解できない」ということや「先生にご苦勞様と言って失敗した」ということについて話し合いたい。

Cさんが言った、「先生にご苦勞様と言って失敗した」ということがなぜ失敗なのかということについて多くの子どもが分からなかったので、日本人の習慣や昔からの言い伝え、礼儀作法などについても調べていくことになった。

子どもたちの調べから出てきたことは、「ご苦勞とは、昔えらい人が下の人に言った言葉で、下の人からはお疲れさまでしたというのが本当だ」というようなことであった。子どもたちは調べたあとも「よく理解できない」「今は昔と違うのだから使ってもおかしくない」「自分たちが知らなくて外国人から教えてもらうとは情けない」といったことを話していた。また、これに関連して昔の日本の言い伝えや慣習についても調べた。

また、Wさんの話を聞いて、1人の子どもが「Wさんはどうして戦争のことを話したのかな。ミャンマーと日本が昔戦争をしたのかな。日本人が何かしたのかな」という疑問を投げかけ、子どもたちはそれぞれに日本とドイツ・ミャンマー・中国との関係を調べ始めた。そして、第2次世界大戦を中心に調べ、ドイツとは同盟国であったこと、中国やミャンマーとは戦争をしたことを知った。また、中国やミャンマーで日本軍が多数の人民を殺害したことを調べた子どももいた。

4. 第3回目の交流：留学生と話し合おう

第3回の交流の前に担任が三重大学に出向き、子どもたちが第1回・第2回で思ったことや第3回で話し合いたいと思っていることを伝え、留学生からも子どもたちと議論したいと考えていることを聞かせてもらった。そして、他の留学生も交え、日本に来て戸惑ったことや理解できない習慣や考え方、戦争のことなどについて議論をした。その内容を学校に帰り子どもたちに話し、第3回の交流について再確認をした。第3回の交流では、子どもたちと留学生から出された話し合いのトピックの中で共通する2つのことをとりあげ

ることとした。「背が高い・鼻が高いのは長所なのか」と「戦争」のことであった。

第3回の交流は、以下の2つのことをねらって行った。

- 「背が高い・足が長いのは長所なのか」について、留学生を交え話し合うことで、「日本人は日本人のよさや特徴を生かした方がよい」「外見だけではなく中身も見た方がよい」「世界には様々な特徴を持った人がいるから、背が高いとか足が長い方がよいという考え方ばかりではいけない」といった様々な考え方があることを知る。
- 戦争について、3人の留学生にそれぞれ自分の考えを語ってもらい、そのことについて話し合うことで、子どもたちの戦争についての学習意欲を高める。

本時では、2つのテーマについて話し合ったが、その中の1つのテーマでも充分45分間話し合える内容であったと思われる。また日本語の壁もあり、留学生と子どもたちの話し合いをうまく絡めることは相当に困難であった。

例えば、背が高いことが長所かどうかの話し合いでは、背が高いことで便利なのがあるのかどうかや、個人の好き嫌いであったり、あこがれの対象であるだけで長所ではないといったこと、また人間の価値を判断するのを何をもってするのかといったことまで話が広がり、交錯し、話し合いになりにくかったという反省があげられる。

またもっと1つ1つについて深めればよかったと反省する点として、Wさんの言った「自分の背丈、自分の足でいい」ということに焦点を当てて、それでも見た目にとだわる子どもたちとの考えの違いを考えさせることも必要だったと思う。そうすることで子どもたちに自分たちの考え方や生き方を振り返らせることもできたのではないだろうか。他にも「自国のパスポートをもっていない人が外国人であり、見た目ではない」という考え方が出たが、これに対しても、「国とは何か」や「外国人とは何か」ということを考えさせるきっかけにすることができたのではないかと考える。

Wさんの、「自分に自信を持っているから背が高い人に対しても気後れすることなく話ができる」、またSさんの、「人間関係で一番大切なのは見かけではなく、相手とよい話が出来るかどうかだ」といった考えは、子どもたちに感銘を与えたようであった。この発言から子どもたちは授業後も「この発言に感心した」「Sさんは見かけで人を判断しないよい人だと思った」「Wさんを見習いたい」などと指導者に話しかけてきた。このような外国人の考えに触れることができた意義は大きいと思われる。

戦争の話については時間がなかったことと、子どもたちがまだ戦争については学習前であるので、留学生の話を聞き、感想を言うことだけにとどまった。そして、戦争について

は子どもたちの発言や感想を見ても、「世界中どこでも、だれでも戦争はいやだと分かった」「戦争のつらさが分かった」「やはり平和がいい」といったように、きれいごとの一般論で話が進んでしまったことが残念である。また、第2回の感想に「自分たちには関係のない過去の戦争でも自分たちのイメージ（の一部）になっているんだな」と書いた子どももいたが、過去の戦争を「自分や留学生には直接関係ない」とする考えに対比させることができなかったことも残念に思う。その子どもは第3回の感想にも3人の留学生が「自分に直接関係ないのに戦争のことを考えていてえらい」と書いている。このような考えについても今後再度取り上げていきたい。

しかし、3人の留学生からそれぞれ戦争についての考え方を聞いたり、それぞれの人の母国で戦争について教育を受けていたり語り継がれているということを知ることができたのは子どもたちにとってよかったことである。子どもたちは、過去の戦争や色々な国との過去と現在の関わりについても調べてみたいという気持ちを、強くもったようであった。

以下が第3回交流を終えた子どもたちの感想である。

「3つの国の人に質問すると、それぞれの国で違った意見があったので面白かった。逆に僕たちの考えと意見が同じだったこともあったのでよかった。これから戦争のことや世界の国でどんなことがあったかについて勉強したい。今日 W さんの話で戦争のつらさや大変さがよく分かった。もっと3人の方の意見が聞きたいと思った。」「いろんな地方の考えや他国の考え方が分かってよかった。国境を越えるだけで、こんなに文化や考え方が違うことが分かった。でも、やっぱりアジアの近いところ同士では（中国と日本）考え方が似ていた。これからもっと他国の文化や歴史について勉強したい。ミャンマーが日本と関係があったということを知らなかったのが勉強したい。」「世界の国々は平和であつたらいいなとみんなが思っていることが分かった。これからはみんなの国がどんな関係か、またどんな関係だったのかを勉強していきたい。とにかく全てのことが楽しかった。」「ふだん戦争のことなんて考えたこともなかったから、この第3回の交流でいろんなことを知ったのでよかった。これからもっともっと戦争について調べをしていきたい。日本が犯した罪や人々に与えた痛みなどを知りたい。」というものであった。

子どもたちは皆、自分たちの考えを出して、留学生の考え方を聞いて、議論することのできた楽しさや意義を書いている。また、どの子も戦争のことを考えてみたいという意欲を持ったことが分かる。

II. 考察

1. 国際理解教育の3つのタイプ

外国人との交流を通して国際理解学習をするとき、以下のような3つのタイプを想定することが出来る。

- ① 外国人を招いて一緒に過ごし、その国の基本的な文化を紹介してもらう。
- ② 外国人との交流をきっかけとして、その国の地理や人々の生活や文化を学習する。
- ③ 特定の国や地域、文化について、また日本との関係についての学習を通して子どもたちが問題意識をもち、それらに応えてくれる可能性のある外国人を招いて交流する。

①については、特に低学年の場合、外国人と接することへの抵抗感をなくし、外国人に親しもうとする気持ちを育成することをねらう場合で、一緒に遊ぶ、歌を歌う、外国人に食生活や風俗等のその国の文化を紹介してもらうといったことが考えられる。

②については、国際理解学習のきっかけとして、外国人との交流を位置づけるものである。今回の実践は、上記の3つのタイプに照らしてみると、②に相当すると言えよう。

今回の交流の出発点においては、特に子どもたちに問題意識はなかったし、学習における外国人招聘の必要感があったわけではなかった。ただあったのは、外国人と何かをしたい、何かを伝えたい、日本を知ってほしい、何か教えてほしいというような漠然とした興味や思いだけであった。そのような中から出発し、日本や日本文化をテーマとして設定し、1回目は子どもたちの日本紹介、2回目は留学生の考える日本の紹介をし、3回目は、1回目、2回目から出てきたお互いの価値観の違いを明らかにして話し合うことになった。

この場合、交流の時間だけが、子どもたちの学習の場になるのではなく、留学生の来校以前に学習を進めることや交流が終わってからも、交流で出てきたことを生かして学習を進めていくことが大切になる。そのことが1回限りのイベント的な学習ではなく、継続的な学習を可能にする。

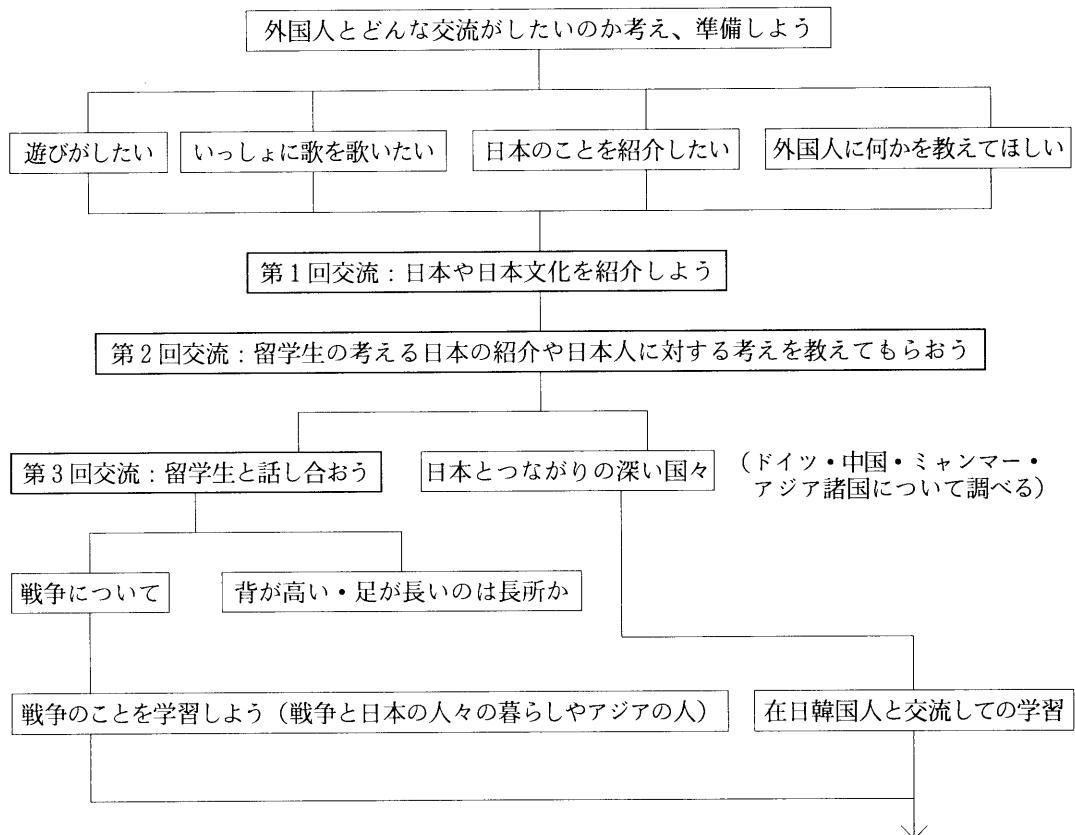
③については、最初に、学習を通して子どもたちの問題意識があり、それに応えてくれる外国人を招いての学習というタイプである。子どもたちの中から、今調べていることや考えていることに関わって、こういう人に来てほしいという必要感が生まれ、それに応えてくれる外国人との交流を持つことでさらに学習が深まっていく。

いずれのタイプにしても学習を一過性のものとして終わらせるのではなく、継続して取

り組み、子どもの問題意識に沿った学習を展開することが大切である。

今回の授業では、子どもたちと留学生の価値観の対立を発見したり、子どもたちの気づいていない過去の日本との関わりに気づかせるために、留学生との議論という形をとった。単に、生活習慣・食生活といった特定の個人に来てもらわなくても本やインターネットで調べたり、ビデオやテレビで見たりすることが可能なことを教えてもらうことを目的とするのではなく、お互いに話し合ってみないと分からない、個人の生き方・考え方・価値観にふれることを目指したという点で、今までとは違った国際理解学習をすることができたのではないか。子どもたちも留学生も自分の考えを出し合い、話し合えたということは成果だったように思う。

図1 子どもの思考の流れと国際理解教育授業の展開



今後は、3人の留学生との交流だけで終わるのではなく、社会科の「日本とつながりの深い国々」の単元や「戦争」の単元とつながって、過去や現在の日本と外国のつながりの学習に発展していくだろう。

この交流をきっかけにして、子どもたちはミャンマー・中国・ドイツという3つの国に興味を持ち、日本との関わりを中心に調べ始めている。この学習は社会科の「日本とつながりの深い国々」の学習につながっていくだろう。また、Wさんの言った日本の技術協力ということに関連して、日本や世界の国際協力の学習に発展する可能性ももっている。

また、今回の2つ目のテーマであった戦争については、どの子どもも、日本が過去にした戦争について、強い興味を持っている。次は、どうして過去に戦争が起こったのか、日本軍は海外でどんなことをしたのか、戦争中の世界の人々の生活はどんなものだったのか、過去の戦争は今の自分たちには関係のないことなのかといったことを考えるきっかけになったように思われる。今後このようなことに取り組んでいきたい。

本時で出た、「自分の背丈・足でいい」「自国のパスポートを持っていない人が外国人であり、見た目ではない」といった3人の留学生の発言についても、再度子どもたちと吟味をして、その意味や思いについて考えていきたい。そうした活動を通して、子どもたちに、さらに深い問題意識やそれに対応した外国人との交流への必要感が出てくると思われる。このきっかけを生かし、できれば子どもたちの学習から生まれる必要感に基づいて外国人を招聘し、学習を進めていきたい。

2. 留学生にとっての交流の意義と問題点

この交流プログラムにはすでに50名近い留学生が参加しており、そのほとんどが、日本の小学校の環境や教育システムや子どもたちの生活に関心を示し、附属小への訪問に概ね肯定的な評価をしている。以下、留学生のコメントを例示すると、

- *楽しかった。時々ちょっと大変だった。食事で少し困った（量が少ないし、肉が入っていないこともあるし、平衡がとれていない）。（原文日本語）
- *実は私は子どもに対して気がちょっと短いが、C組の生徒にとっても感動しました。（一部省略）訪問回数と時期はちょうどよかったと思います。私はC組の題目（異文化理解）をととても大切にしているので、面白い時間を過ごせました。（原文日本語）
- *子どもたちは様々なことを系統的に自分たちで考え積極的に勉強している。子どもたちが自信を持って発表するのは素晴らしい。一緒に食事をしたり遊んだり出来たのもよかった。（英語より筆者が抄訳、以下同様）
- *大変興味深いプログラムだと思う。私の国では、小学生が外国人と接するような機会はほと

んどない。子どもたちの発表は素晴らしかったが、日本語力の限界があって理解できないことも多く残念だった。子どもたちと歌を歌ったのは楽しかった。

- * とても楽しかった。一緒に話したり、遊んだり、掃除したり、料理をしながら、子どもたちの暖かさを感じた。このプログラムは、日本の子どもたちと留学生の相互理解や友好のためによい機会だと思う。
- * 子どもたちと交流できたのはほんとによかった。実際に授業に参加して、先生がどのように子どもたちを指導するかを見るのは興味深かった。ただ、2回目、3回目の交流との間はあまりあかない方がいい。
- * 子どもが好きなので、私にとって本当に楽しいひとときだった。もっと違った時間帯にも訪問することが出来たらよかった。
- * 子どもたちとの交流はとても楽しかった。訪問の頻度やタイミングもちょうどよかった。
- * とても楽しく、興味深かった。子どもたちはとても親しみやすくうち解けていた。頻度もちょうどいい。
- * 面白かった。あまりやかましいことと、(自分の)語彙が少ないため、会話がよく理解できないこともあった。子どもたちもコミュニケーションの難しさを感じただろう。
- * 日本の子どもたちの勉学環境を観察するよい機会となった。
- * 小学校を実際に訪問して日本の小学校教育システムについて知ることは大変興味深かった。
- * 子どもは苦手だったので、最初はちょっと心配だった。けれど、子どもたちは素晴らしかった。すごく楽しかった。いろいろな活動を一緒にしたがどれも面白かった。
- * 小学生と交流するのは面白かった。自分たちの日本語力は小学生以下だと気づいた。あまり話すことが出来なくて困ったこともあった。
- * 日本の小学校教育を内側から見るよい機会だった。2、3回の交流機会はちょうどよい。

上記の留学生のコメント及び彼らと子どもたちとの交流活動の観察に基づいて、以下、このプログラムの意義といくつかの問題点を整理してみたい。

子どもたちとの交流は、留学生の大学での修学生活とは対照的である。大学という大人ばかりの環境の中で、自己の語学力や日本的環境の中での行動規範に関する知識や情報が限られがちな留学生たちの生活にはストレスがつきものである。そうした環境を離れ、彼らのストレス源とは無縁な子どもたちと交流することは、一時的にせよ不安や葛藤から開放され息抜きをするひとつの機会とも言えよう。この点は、小学校への訪問に際して、留学生たちが一様に明るくくつろいだ表情を見せ、「楽しかった」、「面白かった」といったコメントが大多数の参加留学生からまず出てくることから分かる。

また、日本の小学校教育は、教育学専攻の留学生に限らず、どの留学生にとっても、自

国のシステムや自身の経験に照らして容易に比較可能な対象である。この交流をそうした制度や環境の違いを観察する機会として評価するコメントが出てくる所以である。彼らが、日本の小学生は騒がしく規律が乏しいと見るか、教師の指導が行き届いていて団体行動に統制がとれていると見るかは、とりもなおさず自国の文化との比較に基づいており、留学生同士、それぞれの観察結果を披露し合い、そこから出身国の文化比較に発展することもある。

また、留学生たちは総じて、自分たちに与えられた「異文化からの使者」の役割を負担に感じるよりはそれを楽しむ様子が見られる。自国の文化や人々の生活について、手持ちの写真や資料を活用して、子どもたちの理解力に合った説明を組み立て、presentationを準備することを積極的にやっている。初級日本語を学習中の留学生にとっては、これは時に相当の困難を伴う課題ではあるが、同時に習いたての文法を運用し、語彙を広げる機会でもある。ひとつには、こうした観点から附属小における交流機会を評価することも可能だろう。

外国語や外国文化の習得が母語や自国文化の習得と異なる点のひとつとして、「限定的習得」ということがあげられるだろう。個人は一般に、幼少時より長い時間をかけて段階的に異なった集団や副文化を経験しつつ、幅広く言語や文化を習得する。比べて、外国語や外国文化の習得は、特定の関心のある分野に限定されがちである。こうした特性は、留学という機会をもつことによって、すなわち一定期間その国に生活し、さらに大学環境に縛られず、幅広い社会関係を取り結ぶ機会を持つことによってある程度変わってくる。また、教科書を通じて習得した言語を多様な機会、多様な人々に対応しつつ運用することによって、そのコミュニケーション力は磨かれていくと言える。

ただし、小学生との交流は、特に初級段階の日本語力しか持たない留学生にとっては、相当に「過酷な」コミュニケーション機会であるとも言える。なぜならば、子どもとのコミュニケーションは、教科書で標準日本語を中心に学んでいる段階の外国人にとっては決してやさしいものではないからである。文法通りに正しく単語を並べ、「です・ます」調で話す留学生を子どもの側は理解できるとしても、文法の枠を超えて倒置法と省略法を駆使して畳みかけてくる子どもたちの口語口調にほとんどの留学生が面食らう。外国人の語学力をある程度察知して表現法を適応させようとするような大人の、それもある程度異文化間コミュニケーションの体験を積んだ大人の判断力を最初から子どもたちに期待することは難しい。

また、留学生のひとりがコメントしていたように、小学校の教室内環境は、大人ばかりの環境に比較すると、異常なほど騒がしく感じられるのも事実である。母語の場合、人は

様々な雑音の中でも言葉を聞き分け理解する能力が高いが、それが外国語になると、劣悪な聞き取り環境の中での理解力は格段に落ちてしまう。したがって、小学生たちとのコミュニケーションを、単に習得中の日本語の運用機会と捉えると、それは必ずしも適切な条件を備えた最も望ましい機会とは言えないかもしれない。子どもたちとの言語コミュニケーションの困難さは、参加留学生のほとんどが体験することなのである。そこで、留学生の日本語力の限界をある程度克服するために、3回の交流を、言語コミュニケーションへの依存度のなるべく低い活動（ゲームや遊び、音楽、食物等を媒介とした活動）から始めて次第に言語コミュニケーションの度合いを増していく工夫をしたり、視覚材料を多用している。

言語によるコミュニケーション能力が限られている場合の異文化接触場面におけるセルフ・マネジメント（どのように振る舞ったらよいか、どうやって間をもたせるか）の問題は、個々の留学生によって異なってくる。この問題は、プログラム化されていない場面、すなわち、個々の留学生が子どもたちと向き合い自由にコミュニケーションを取ることを余儀なくされる場面（班毎に留学生が一人ずつ配置された給食時間や食後の遊び時間等）において際立つ。こうした場面では、何を話し、何をするかを当事者である留学生と子どもたち自身が見出さなければならない。互いの接点がうまく見つけられず、ただ黙々と食事をしたり子どもたちから取り残されてしまう状況を避けるためにはどうすればよいか。このとき、持ち前の遊び感覚等を駆使して巧みに接点を作り出せる者とそうではない者とは、場面における心理的圧迫を回避する上で相当な差が生じる。

さらに、子どもたちや留学生の能力に合わせ注意深く企画した授業に関しても、本報告に取り上げたような討論場面が入ってくると、留学生の受け止め方は分かれてくる。今回、「日本人大学生がさっぱり真剣な議論をしない」ということに失望を感じていた留学生Sは、子どもたちとの討論を大いに楽しみ、その内容を高く評価した。しかし、もう一人の留学生Wの場合は、母国で受けた教育課程の中でほとんど討論というものを経験したことがなく、絶えず自分の意見を求められ、しかもそれを限られた言語力で表現しなければならないことに相当の苦痛とストレスを見出す結果となった。

このように、附属小学校における留学生交流は、大人と子ども、留学生と日本という二重の意味での異文化接触の機会であり、実験場であると見る事が出来る。異文化接触は自然に放置されたままでは豊かな成果を生み出すことは難しく、関与する個人や集団にとって否定的な結末を招来することにもなりかねない。創意に富む注意深い企画とそこから生み出されるものへの省察を重ねることによって、多様なニーズに対応し得るプログラムが少しずつ形成されていくと言えるだろう。附属小学校と留学生センターとの共同プロジェ

クトは緒についたばかりと言っても過言ではない。

参考文献

- 江淵一公篇（1997）『異文化間教育研究入門』玉川大学出版部
大西守（1992）『異文化ストレス症候群』バベル・プレス
川端末人・多田孝志編著（1990）『世界に子どもをひらく－国際理解教育の実践的研究－』創友社
菊池章夫・堀毛一也編著（1994）『社会的スキルの心理学』川島書店
小林哲也・米田伸次編著（1995）『国際理解教育論選集－学校教育篇－』創友社
佐野正之・水野一朗・鈴木龍一（1995）『異文化理解のストラテジー』大修館書店
谷川彰英（1996）『国際理解教育と国際交流』国土社
西田司（1994）『異文化と人間行動の分析』多賀出版
箕浦康子（1997）『地球市民を育てる教育』岩波書店
渡辺文夫編著（1995）『異文化接触の心理学』川島書店

（報告書）

- 三重大学教育学部国際理解教育プロジェクト班（1999）『国際理解教育の総合的研究』教育改善推進費（学長裁量経費）実施報告書
三重大学教育学部附属小学校（1999）『3領域の研究のまとめ：国際理解教育・環境教育・情報教育』
大阪地域留学生等交流推進協議会（1999）『国際理解教育推進のために』